20251221 降誕祭主日礼拝

司式:大谷　昌恵

奏楽:中井喜久子

前奏:「前奏曲 ハ長調」(J.S.バッハ)

招詞:城門よ、頭を上げよ、とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる。栄光に輝く王とは誰か。万軍の主、主こそ栄光に輝く王。(詩24:9-10)

讃美歌:259「いそぎ来たれ、主にある民」

交読:詩編　98篇

01【賛歌。】新しい歌を主に向かって歌え。主は驚くべき御業を成し遂げられた。右の御手、聖なる御腕によって／主は救いの御業を果たされた。

02 主は救いを示し／恵みの御業を諸国の民の目に現し

03 イスラエルの家に対する／慈しみとまことを御心に留められた。地の果てまですべての人は／わたしたちの神の救いの御業を見た。

04 全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。歓声をあげ、喜び歌い、ほめ歌え。

05 琴に合わせてほめ歌え／琴に合わせ、楽の音に合わせて。

06 ラッパを吹き、角笛を響かせて／王なる主の御前に喜びの叫びをあげよ。

07 とどろけ、海とそこに満ちるもの／世界とそこに住むものよ。

08 潮よ、手を打ち鳴らし／山々よ、共に喜び歌え

09 主を迎えて。主は来られる、地を裁くために。主は世界を正しく裁き／諸国の民を公平に裁かれる。

朗読聖書①イザヤ書9:1-6

01 闇の中を歩む民は、大いなる光を見／死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。

02 あなたは深い喜びと／大きな楽しみをお与えになり／人々は御前に喜び祝った。刈り入れの時を祝うように／戦利品を分け合って楽しむように。

03 彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を／あなたはミディアンの日のように／折ってくださった。

04 地を踏み鳴らした兵士の靴／血にまみれた軍服はことごとく／火に投げ込まれ、焼き尽くされた。

05 ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神／永遠の父、平和の君」と唱えられる。

06 ダビデの王座とその王国に権威は増し／平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって／今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。

朗読聖書②マタイによる福音書1:18-25

◆イエス・キリストの誕生

18 イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。

19 夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。

20 このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。

21 マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

22 このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

24 ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、

25 男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

祈祷

聖なる主なる神さま、聖名を崇め賛美します。今朝も、あなたは私たち一人ひとりの名を呼び、この降誕祭、喜びのクリスマスの礼拝へと招いてくださいました。ありがとうございます。あなたは、この世界の救いのために、愛する御子イエス・キリストをこの世へとお送りくださいました。御子は一人の人間としてこの地上に生まれ、私たちと同じ喜びと悲しみ、苦しみと悩みを味わいながら、生涯を歩まれました。御子は御言葉と御業とによって神の国の福音を告げ知らせ、あなたの御栄光を表されました。そして御子は十字架の死、復活と昇天を経て、今あなたの御許に座しておられます。

主なる神さま、私たちは、御子イエス・キリストが再びこの世にやって来られる日を待ち望みます。あなたの御心が、天と同じく、この地上でも完全に実現する日が来ますように。悲しむ者に喜びが、思い悩む者に平安が、恐れを抱く者に勇気が、対立する者たちの間に和解が、そして、全ての人々の上に、主の大いなる恵が与えられますようにと願います。

今日、御子が与えられた喜びのクリスマスの礼拝に集うことを望みながら、様々な事情でこの場に来ることができなかった者、オンラインでの礼拝にも与ることができなかった者がおります。年齢を重ね思うように体を動かすことができない友、心と体に不安を抱える友、それらの方々の傍に付き添う友、主日の今日もこの世の働きの中にある友など、状況は夫々様々ですが、ここに来ることができないからこそ、なお一層強くあなたの祝福を待ち続ける友たちがおります。どうかそのような方々の上に、ここに居る私たちと同じ恵みと祝福とが与えられますようにと願います。

今朝は、私たちのために、佃雅之牧師が御言葉の取次ぎをしてくださいます。どうか語る佃牧師が大胆に豊かに、このクリスマスの喜びのメッセージを語ることができますように、聖霊を豊かにお送りください。そして聞く私たち一人ひとりの心も整え、その説教を受け止めることができるようにしてください。

喜びの光溢れるクリスマスですが、世の中に目を向ければ、国と国の争いが今なお続き、災害によって不自由な生活を強いられている方々が多くおられます。どうか、特にそのような場所にこそ、御子のお生まれになった喜びが余すところなく伝えられますようにと心から祈ります。そして今日、日本中、世界中で献げられるクリスマスの礼拝の上に、あなたからの大いなる祝福がありますようにと願います。

御子イエス・キリストがこの世界と私たちのために、全てを献げられた事を覚え、ここに集う私たちが深い感謝をもってクリスマスを祝い、信仰を新たにすることができますように。

この感謝と願いの祈り、御子イエス・キリストの聖名によってお献げします。アーメン

合唱　While by my sheep (羊のそばで) 聖歌隊

講壇「神はあなたと共に」　　佃　雅之

今日、このクリスマスの朝、与えられた御言葉に耳を傾ける時、救い主イエス・キリストの誕生の出来事が『ヨセフ』と言う一人の人の深い葛藤と神の言葉に聞き従おうとする決断を通して語られていることに気づかされます。『マタイによる福音書』が伝えるイエス・キリストの誕生はヨセフの試練の物語でもあります。そこに描かれているのは、喜びに満ちた物語ではなく、むしろ理解できない出来事に戸惑い、どのように歩むべきかを問い続ける一人の人の極めて現実的な姿です。

この物語の中に、人間の言葉は記されていません。語っているのは「主の天使」だけです。母マリアもヨセフも沈黙しています。言葉は時に、自分自身を守るための道具になります。私たちは語ることで正しさを主張し、恐れや弱さを覆い隠そうとすることがあります。しかし、ヨセフは、自分の力で事態を動かそうとすることを手離し、全てを神に委ねて救いの時を静かに待つ道を選びました。この物語は神の救いがどのように始まったのかを静かに私たちに示しているのです。

聖書は、婚約中のマリアが、「二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていること」を何の前触れもなく告げます。このことが、ヨセフを激しく悩ませることになりました。なぜなら、全く身に覚えのないことであったからです。当時のユダにおいて婚約は法的にも宗教的にも結婚と同じ重みをもっていました。婚約中のマリアが妊娠していることを律法に照らせば姦淫の罪を犯したものと見做され、その裁きは石打の刑、マリアの命を奪うものです。クリスマス物語は人間の苦悩から始まっています。

聖書はヨセフを「正しい人であった」と記します。これは“欠点のない人格者”と言う意味ではありません。“神の律法を重んじ御心に従おうとする人”という意味です。ヨセフはマリアを告発することもできました。正義の名のもとに切り捨てることもできたのです。けれども彼は、その道を選びませんでした。「マリアを公に辱めることを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した」のです。これが“正しい人ヨセフ”の精一杯の選択でした。そこには律法を振りかざして人を裁くのではなく、律法を大切にしながら人を生かそうとする聖書が教える『愛』が表れています。しかし、ヨセフに恐れがなくなったわけではありません。自分の身に起こった理解できない出来事に深い恐れを抱いていました。もし自分が離縁したならマリアは人々から寡婦として扱われることになります。その時マリアは生きていけるのか、また、その身に宿った子はどのような歩みを強いられるのか、ヨセフはそうした思いを抱えたまま眠れぬ夜を重ね、答えも出口も見えない現実の中で、怒りとも悲しみともつかない思いに苦しんでいました。その姿は神が救いの御業をなされるとき人がしばしば経験する苦悩や恐れ、不安に直面する姿を映し出しています。しかし、その苦しみが深まり人間の力ではどうにもならない時、神はその人に近づいてくださるのです。

恐れを抱えたままのヨセフのもとに「主の天使」が現れます。これが『神の時』でした。私たちもまた、同じように人生の深い悩みの中で神と出逢います。なぜなら人は、自分の力ではどうにもならない現実の前に立たされた時に、本当の意味で神を求めるようになるからです。神は私たちが留まってしまうその場所を出逢いの場として選ばれるお方なのです。

天使は「ダビデのヨセフ」と呼びかけます。天使がヨセフを「ダビデの子」と呼んだ時、マタイは私たちに福音書の最初のページの系図を思い出させます。この長く続く系図は、「ダビデの子」という一言のために記されたのです。イエスの誕生は、神の救いの約束が実現して行く歴史の中で起こった出来事なのです。1:16 に記された「ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった。」と結ばれた系図の意味がここに示されます。聖書の系図が示すように、ヨセフはダビデ王に繋がる家系の人です。そのヨセフが恐れを超えてイエスを自分の子として受け入れ、名を与えるなら、イエスは法的にもダビデの子とされます。マタイが最初に記した系図の意図は、聖霊による誕生というこの二つの主題は一つの出来事として結び合わされています。

ヨセフの思いや願いとは関係なく、思いもよらない出来事が起こりました。それは、これまでの人生の中で最も大きな試練でした。しかし神はその試練を通して、“わたしの救いの歴史の中に生きよ”とヨセフを招いておられます。人間の正しさではとても受け止めきれず、乗り越えることもできないようなところに神の正しさはあります。天使は、この出来事の背後に、神ご自身の計画があることを告げます。驚くほかなく、到底信じ難い出来事であっても、それは偶然でも混乱でもなく、神の深い御心の内に起こっていることなのです。

天使はヨセフに「恐れず妻マリアを迎え入れなさい」と語りました。それはヨセフが、これまで拠り所としてきた自分の正しさから彼を解放する言葉です。人間を罪から救うということは、人間の正しさでは決して成し遂げることはできないからです。聖書が語る罪とは単に“悪いことをした”という意味のことではありません。“神を神として信頼し神と共に生きる関係が壊れてしまった状態”を指します。私たちは、しばしば、神に支えられて生きている者であることを忘れ、自分の力で立ち、自分の正しさで生きようとしてしまいます。そこに人間の弱さがあり、欠けがあり、深い罅（ひび）があるのです。私たちは誰もが罪の影を帯びて生きています。

私たちの命は神の創造されたものであり、神から与えられた掛替えのない賜物です。しかし、その命は神との関係を離れては本当に正しく生きることができません。ですから、罪の救いは人間からは始めることができないのです。人間の正しさではなく、神の正しさによってのみ罪は裁かれ、許され、そして乗り越えられて行きます。聖書が語る救いとは人間が自らを救い上げる物語ではありません。神がその無力な人間のところへ下って来られる物語なのです。

主の天使はヨセフに、「その子をイエスと名付けなさい。」と言います。当時、『イエス』という名前はごく身近な名前でした。神は特別で華やかな名前ではなく、日常の中に溶け込むような名をもってこの世界に救いを送り出されたのです。しかし、その名前の意味を辿って行くと、『イエス』というその名前には「主は救い、主が救って下さる」という約束が宿っています。聖書において名は、単なる呼び名ではありません。その人の使命、生き方、存在理由を表します。イエスはその名の通りに生きられました。傷ついた者に近づき、罪人と食卓を囲み、十字架にまで従い貫かれました。その歩みの全てが、“イエス・主は救われる”という名の実現だったのです。その名は、「インマヌエル」と呼ばれます。“神は我々と共におられる”、この約束が歴史の中で現実となりました。それが、“最初のクリスマス”でした。

「ヨセフは眠りから覚め」ます。ヨセフは夢で天使と出会うまで深い葛藤の中にありました。理解できない出来事、受け入れ難い現実、正しさと愛の間で揺れ動く心、彼は“迷いと恐れの眠りの中にいた”と言えるでしょう。しかし、神の言葉を夢の中で聴いた時、ヨセフは眠りから覚めます。聖書において、

「**目覚める**」という言葉は“**新しい命に立ち上がる**”こと、“**神の呼びかけに応答して行き生き始める**”ことを意味します。それはまさに“**甦り･復活**”と呼んでよい出来事です。“**迷いと恐れの中に沈んでいた一人の人が、神の言葉によって目を覚まし、再び立ち上がる、その姿**”がここに描かれているのです。

眠りから覚めたとしても目の前の現実に変わりがあるわけではありません。問題はそのまま残っています。事情が全て分かったわけでも、マリアへの疑いが消えたわけでもありません。しかし、ヨセフにとっては、自分の思いも含めて、ある意味で全てが変わってしまったのです。ヨセフは主の言葉によって変えられました。不信感や疑い、人間の思いが渦巻く中で、それでも彼を動かしたのは主の言葉でした。

私たちもまた、混乱の中に置かれます。何が正しいのか分からず、言葉にならないほど複雑な思いを抱えて立ち尽くすことがあります。その時、問われているのは、“**私たちは誰の言葉を聞くのか？**”ということです。そして、“**何によって動かされ、生かされているのか？**”ということです。

神は実際に人となって既にマリアの胎の中におられます。主の言葉に従う者は自分の思いや願いに囚われ続けることはありません。人間の正しさに全てを委ねるという愚かさにも縛られません。生きておられ、働き、語りかけてくださる神に捕えられ、動かされ、思いを定めて生きて行く、それが主の言葉を信じた者の姿です。

クリスマスの物語は主イエスが誕生された出来事と同時に、主の言葉によって目覚め立ち上がった一人の人間の姿を私たちに示しています。ヨセフは天使が伝えた主の言葉を完全に理解することができたから従ったのではありません。分からないことや不安を抱えたまま、それでもなお、神の言葉に身を委ね歩み始めたのです。

私たちの信仰の歩みも同じです。全てが分かってから始まるのではありません。答えが揃ってから歩み出すのでもありません。ただ、御言葉に聞き、御言葉に従って踏み出すことから、信仰の歩みは始まります。私たちも御言葉を信じたい、御心を知りたいと願います。心のどこかで“**ヨセフのように天使が来てくれたら迷わずに済むのに**”、と思います。しかし天使の声が聞こえなくても、礼拝の中で主の言葉は今日も私たちに与えられています。ヨセフのように、今、自分の目の前に居る人に向かって御言葉に聞いた通りに生きることが赦されています。目の前に居る人に向かって生きるとは何か特別なことをするという意味ではありません。それは、“**今日、神が私たちに与えておられる自分にとって大切な人に心を向けて生きる**”ということです。家族かもしれません。今、隣に座っている人かもしれません。

ヨセフがしたことはただ一つ、“**マリアを迎え入れる**”ということでした。その小さな服従の中で、神の救いの御業はこの世界に始められたのです。このヨセフの決断の中に、“**インマヌエル・神は我々と共におられる**”という福音の力が確かに生きており、力強く働いています。「**インマヌエル**」という言葉が、単なる神学的な概念や抽象的な信仰告白に留まらず、恐れと葛藤の只中にある一人の人間の具体的な生き方として現れる出来事になったのです。

クリスマスの出来事を通して、主なる神は新しい人間を創造されようとしておられます。そのために主イエス･キリストがこの世界に来てくださいました。主は私たちと共にいてくださり、共に歩み、語りかけ、立ち止まる私たちを支え、助け、そして導いてくださいます。そして私たちが新しい人として生まれ、新しい人として生き続けることができるように、絶えず伴ってくださるのです。

「**インマヌエル・神は我々と共におられる**」、この御言葉に、クリスマスがもたらす希望があります。クリスマスの真の意味は、“**キリスト礼拝**”です。聖霊によって導かれて、今日、この礼拝に招かれた皆さん、

“**クリスマス、おめでとうございます。**”

お祈り致します。

父なる神さま、愛する方々と共に、クリスマスを祝う恵みを与えられていることを心より感謝し、聖名を崇めます。私たちは、不安や恐れに囚われやすい弱く罪深い者に過ぎません。それにも拘らず、このような私たちのために、そして全ての人の好きのために、御子イエス・キリストを、この世界に、お遣わし下さったことを重ねて感謝致します。どうか主よ、私たちがインマヌエルの主に信頼し、新しい人として生きることができますように導いてください。

私たちの救い主、主イエス･キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌 260「いざ歌え、いざ祝え」

献金・感謝・主の祈り（橋本義武）

父なる神さま、聖名を賛美致します。このクリスマスの礼拝に招かれ、御言葉を頂き、共に賛美する時を与えられましたことを心より感謝申し上げます。

悩みの中に、試みの中にある私たちを、あなたは光ある方向へ導いてくださいます。どうか、その光の中を歩ませてください。私たちの小さな歩みがあなたの御心に適うものでありますように。

神さま、ここに献げました物を聖めて神さまの御用の為に用いてくださいますように。

主の祈りを共に祈り、新しい一週を始めさせてください。…『**主の祈り**』**アーメン。**

派遣：讃美歌 91「神の恵みゆたかに受け」

祝福：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告：次週年末大掃除（外回り清掃）の案内

後奏：「フーガ ハ長調」（J.S.バッハ）